

平成 27 年度プリプレス研究会研究例会印象記

小西光彦*

Mitsuhiko KONISHI*

(一社)日本印刷学会 技術委員会 プリプレス研究会主催による研究例会が、平成 27 年 11 月 27 日(金)に日本印刷会館で開催された。今年度のテーマは「今さら聞けない、プリプレスの基礎知識と課題～基本理論、トラブルの対処法、そして最新の情報まで～」と題し、入稿から刷版までのプリプレス工程における基本理論、そしてデジタル印刷、クロスメディアに関する最新動向について各プログラムで講演いただいた(写真 1)。印刷会社、印刷関連メーカーなどの方々、70 余名に参加いただき、開会にあたってはプリプレス研究会主査の松林より「デジタル化が進むなか市場の要求やニーズに応えるため、より難しい工程設計や管理、オペレーションを日々求められている。それがゆえにトラブルも増加傾向、高度化しているのが現状。そこで今回のテーマである基礎をしっかりとおさえることで、トラブル減少や迅速な対処に繋げてほしい」と挨拶があった。下記にプログラム概要をまとめる。



写真 1 講演会場の様子

1. 知るとスッキリ！文字の話

(株)モリサワ 井上芽久美氏
印刷・出版の分野のみならず、日常生活には「フォント」

が欠かせない存在となっている。日本は欧米に比べてフォントやタイポグラフィに関する認識が浅いと言われている。各種グラフィックデザイン制作において、デザイナーは「シェフ」、文字とは「食材」と例え、デザイナーはターゲットに応じて、「字面」、「重心」、「ふところ」、「エレメント」、「ウェイト」、「骨格」からフォントデザインをどのように調理(選定)すればよいかポイントを説明された。よくあるトラブルとしていくつかの事例も紹介されており、日頃あたりまえに使っているフォントの奥深さを感じるとともに、説明も判りやすく良く理解できる内容であった。

2. RIP って何？ RIP の仕組みと網点概論

(株)メディアテクノロジー ジャパン 佐々浦映展氏
印刷物作成には CTP 出力をはじめデジタル印刷においても RIP 処理は必須の工程であるが、どのような処理をしているかあまり認知されていない。市場には単機能 RIP からワークフロー RIP とさまざまな RIP が存在するなか、それぞれ異なった視点で違いを解説されていた(写真 2)。RIP 処理は「文字化け」、「データ化け」といった印刷トラブルの一因となることもあり、RIP 運用に起因することも多い。特に多いのが「制作側と出力側で異なる RIP や RIP Ver を使用」しているケースを挙げていた。RIP 処理の一機能としてスクリーニングについても解説があり、品質と刷りやすさのバランスでは 200 ～ 300 線が主流であると説明があった。講演最後にワークフロー RIP の今後として「指示ステーションになっていくのでは」という話があり、そうなるとう RIP という概念がさらに見えにくくなるので、今回のように RIP の仕組みを学ぶことの重要性をあらためて感じた。



写真 2 佐々浦講師

*東洋インキ(株)
(〒173-8666 東京都板橋区加賀 1-22-1)

3. 印刷版から見た印刷 ～知って得するオフセット技術と版～

富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ (株)
海老塚健史氏

印刷物を印刷するには、「凸版」、「凹版」、「孔版」、「平版」といった印刷方式に相応する印刷版を必要とするが、印刷方式毎にそれぞれの特徴がある。そのなかでオフセット印刷版 (PS/CTP 版) の主な種類を「露光方式」、「露光光源」、「現像方式」からの視点で主な特徴を解説された。刷版の管理方法から刷版トラブル対応の説明もあり、特に良くある刷版トラブルとして「キズ」、「ゴミ付き」の占める割合が多いと説明があった。切り分け方法等、詳細な説明もあり、トラブル回避にも重要な知見であると感じた。

4. カラーマネジメントの基礎 ～色を評価する～

(同) カラードック 宇野則彦氏

印刷物を制作する工程において色についてのトラブルは多く、企業内や企業間の担当者間で観察条件や人に起因する色の見え方、基準に対する考え方、プルーフの品質・性能などに関して認識に違いがある。カラーマネジメントの要素として基本的キーワードを理解する必要がある、多くの項目について解説されたが項目も多く、もう少しポイントを絞れるとさらに理解を深めることができるのではないかと感じた。色基準については世界の色標準 (ISO12647) や認証機関 (JPMA, Fogr) a, IDEAlliance), 認証制度 (JapanColor 他) について説明があった。色の見え方に影響する要因のひとつとして、LED 照明に変わり始めているなかで、高演色評価のものを使うよう注意が必要との話であった。

5. デジタル印刷の基礎と今後の動向

(株) バリューマシーンインターナショナル
宮本泰夫氏

デジタル印刷技術の普及が始まり 20 年余り経過しダイレクトメールやチラシなど、身近な印刷物の中にもデジタル印刷物は増えてきており、当初予測されたよりペースは遅いもののデジタル印刷技術の市場は拡大している。近年

のデジタル印刷技術のトレンドは「大型機と小型機の 2 極化」、「コンベンショナル印刷技術とデジタル印刷技術の融合利用」、「特定市場 (紙器、段ボール、出版、ラベル/フィルムパッケージ) 向け機器」が進むことを挙げている。これらのトレンドをさらに掘り下げて各機器の特徴について解説された。drupa 2016 の予測としては、今のところ新しい技術として Landa への注目が高いとの話であった。

今後の展望として印刷技術のデジタル化は既定路線としながらも、オフセット印刷からデジタル印刷に変わるのはなく「デジタルで何を変えるのか?」と話されており、デジタルを使って何を変えて仕事をとっていか、オフセットとデジタルの利点を組み合わせて何ができるか実践することが必要であると理解した。

6. クロスメディアの最新動向と印刷会社のこれから

ブライター・レイター 山下潤一郎氏

日本アドバタイザーズ協会 Web 広告研究会によれば、クロスメディアとは「それぞれのメディアの特性を活かしながら、相互補完的に情報を提供すること。ユーザーをいかに『動かすか』に重点を置く」と定義される。これに対して、「複数のメディアで個別に展開して、リーチやフリークエンシーを最大化すること。ユーザーに『多くの情報を届ける』ことに重点を置く」ものは、メディアミックスと定義される。クロスメディア最新事例として動画広告を交えながら印刷会社が果たすべき役割として「関係が深まる印刷物を提供する」、「関係が深まる企画を立案・実践する」を通じてクロスメディアの効果・効率を高めることを提案された。クロスメディアの事例はまだ少なく、案件をどう作っていくかが重要である。先回りしたものが認められる世界で、こうした取り組みの中で減少しつつある紙媒体印刷を補うことができるとの話であった。サービスだけで稼ぐのは難しいため、印刷物に落とし込むことに結び付けることを考えることで取り組み易くなると説明された。全体の話として一貫しているのは、提案先の課題を知り、さまざまなメディアを活用して解決方法を提案し実践するということであると感じた。